



HABATAKI

はばたき

UNIVERSITY OF SHIZUOKA

52-1 Yada, Shizuoka-shi Shizuoka-ken 422-8526 Japan
inside NEWS



●CONTENTS●

卒業式式辞	1	国際交流協定大学教員・学生来学	16
退官にあたり	5	留学体験記	17
静岡県立大学の“産・学・民・官”連携を考える集い	7	部局の動き	
2004USフォーラムを開催	9	環境科学研究所	19
大学院薬学研究科の夕刻講義開講	12	附属図書館	21
著書紹介	13	短期大学部	23
本学教員からの著書寄贈	13	地域連携連絡協議会の発足	25
受賞	14	「静岡県立大学健康支援センター」の開設	26
研究助成採択	15	谷田風土記	27
はばたき寄金からのお知らせ	15	学長選挙	27

平成16年度静岡県立大学 卒業式式辞

本日ここに石川静岡県知事はじめ、ご来賓各位、ならびに多数の保護者の方々のご列席を賜り、盛大に平成16年度静岡県立大学学部卒業式ならびに大学院学位授与式を挙行出来ますことは、真に喜ばしい限りであり、関係者一同心より感謝申し上げる次第です。

まず始めに蛍雪の功なり、本年度めでたく卒業される5学部490名、大学院研究科修士課程127名、同博士課程13名の皆さんに対し、大学を代表し心からのお祝いを申し上げたいと存じます。またこの日を心待ちにされ、今ともに喜びを分かち合っておられるご家族の皆様のごこれまでのご苦勞、ご支援に対しましても深く敬意と感謝を申し上げたいと存じます。



さて、私は今年の卒業式を特別の感慨をもって迎えました。6年間の任期を終わり、学長としての最後のメッセージを送ることへの感慨も確かにありますが、それ以上に、今年が“昭和80年”という大きな歴史の節目だからです。と言っても皆さんの中で、このことがピンと来る人は極めて少ないのではないのでしょうか。

今から60年前の昭和20年は我が国の歴史の中で、決して忘れられない、また忘れてはならない太平洋戦争終結の年だからです。この年、例えば3月10日の東京大空襲では、最大の被災者100万、死者10万、6月20日は静岡大空襲で被災者11万、死者1700、6月23日は沖縄本土壊滅、死者19万、8月広島、長崎に原爆投下で敗戦。

つまり60年前の今頃は日本中が断末魔の叫びを上げていた時期で、ほとんどの大学生は繰り上げ卒業等で戦地に赴き、多くの学徒が尊い命を戦場に散らせた年でした。私は小学4年生、学校や勉強どころではなく、命を守ることに懸命で、子供心に戦争の恐怖は忘れ難い記憶として今でも鮮明に残っております。

この年戦火をくぐり、食糧も物資も皆無に等しい状況の中であって、この世に生をうけた人達が、おそらく過去の歴史の中でも例が無いくらいの苦難と激動の時代を逞しく生きて60年、今年めでたく還暦を迎えることになる訳です。一面焦土と化した日本が60年の間に、奇跡の復興を遂げ、様々な挫折を体験しながらも、今日の経済的繁栄を勝ち得た事は、貧しくとも自由と平和を享受しつつ、物質的豊かさを求めて、遮二無二突進した国民の願望と実現への一致した努力があったからに他ならないと率直に評価すべきであると思います。しかし通り過ぎた自らの轍を検証・評価し、未来を予測することなく突進した“つけ”は、様々な歪を社会にもたらしたことも周知の事実であります。

近年我が国は、かつて体験したことのない“**繁栄の中の挫折**”に戸惑い、有効な修復の手立ても見出せずに、いわゆる“失われた10年”も既に過ぎ、今なお混迷状態を脱しきれないでおりますが、世界に目を転ずれば、

あるいは歴史を検証すれば、過去に類似したモデルが存在し、有効な処方箋のヒントが見出せるのではないかと考えています。

私はこれまでも入学式や卒業式の式辞の中で、歴史観に立脚した施策の重要性を強調して来ました。戦争の悲惨さと平和の尊さを知っている戦争体験者は決して二度と戦争を起こしてはならないと強く感じている筈であり、そのことを後世に伝える義務と責任があると強く認識しながら、現実はその逆方向に世界が動いていることに少なからぬ焦燥感と無力感を感じております。戦後60年、我が国は政治、経済、教育あらゆる分野で発展と挫折を繰り返して来たと言えますが、国家や、組織が大きくなればなるほど、過去を徹底的に検証し、軌道修正をはかるタイミングが遅れ、傷口を大きくしているように感じています。組織的な継続性に欠けるからだと思えます。

翻って大学を取り巻く社会環境も近年大きく変貌いたしました。私が学長に就任して6年、戦後60年に較べれば10分の1に過ぎない期間でしたが、国立大学の独立法人化などに象徴されるように、これまで社会から隔絶された孤高の“象牙の塔”が、いわば外圧によって取り壊されたことです。社会の大きな変化に目を閉ざし、自己評価と改善の努力を怠ってきた“つけ”が回ってきたとも言えますが、本学は、そのような変化に、いち早く対応すべく意識改革を含め様々な施策を展開して来たと考えております。それらの点はこれまでも機会をとらえて述べてきた事であり、ここで改めて繰り返すつもりはありません。

本日の卒業式で、これから社会に巣立つ、あるいは、さらに大学院に進学し、研究者としての道を進む皆さんに対し、私が学長として最後に申し上げたいことは「**自分自身の歴史を正しく記録に残し、時に検証・反省することを怠らず、自らの向上に役立てよ**」ということであります。さきほど戦後60年には想像を絶する歴史があったと申しましたが、人生60年と言うのは、一人の人間が、社会のことも、自分自身のことも、自分の目で、肌で、正しく過去を検証できる、意味のある期間であると私は考えています。しかし人間の記憶は年とともに曖昧となり、良い事は美化され、悪いことは忘れ去られ、間違った歴史認識として伝えられることが多いものです。また過去よりも、これから訪れる未来の方に強い関心が移るのは人間の“性”と言えるかも知れませんが、現在そして未来が良くも悪くも過去の集積の上に成り立つ以上、過去の貴重な体験を忘却の彼方に葬り去ることは、個人にとっても、大げさに言えば社会にとっても甚大なる損失と言うべきであります。

それではどうすればよいのか。人間は時間の経過と共に過去の事柄を忘れてしまうように思われがちですが、過去の正しい記録など手がかりを与えられれば鮮明に思い出すことが出来る特性を有しております。私も小さい頃から日記をつけるようにと学校の先生などから指導を受けましたが、その意味することが分からず、面倒臭さが先に立ち、所謂三日坊主の穴だらけの日記帳が空しく散在したままになっておりました。数十年たった後に、それを見ると、当時の社会状況やそれらに対して記された感想など、自分自身の生き様が手にとるように思い出され、自分の生きてきた歴史が復活したような気がい



たしました。その後、きちんとした日記はつけないまでも、時々思いを記した文章等は、どんな些細なものでも記録に残し、保存するようにいたしました。

皆さんは手帳を持っていて、毎日の予定を記入していると思いますが、是非とも一日が終わった時に、予定されたことの結果（成果）と感想（反省）を記しておくことを勧めたいと思います。今は電子手帳やパソコンなど記録を残すのに有効な様々な手段があります。毎日自分宛にメールを発信しておくことも面白いかも知れません。そのことによって自分自身の反省や将来の構想を練ることに繋がるからです。

中国の論語の中に「君子たるもの日に三度は自己反省を行うべし」ということが述べられておりますが、何もなければ反省の材料もない訳です。私は若い皆さんが、これからの洋々たる未知の世界で失敗を恐れず、常にチャレンジ精神をもって、あらゆることに挑戦する勇氣をもって欲しいと強く願っておりますが、失敗した時は、その理由を常に検証し、軌道修正をはかることも必要です。三日に一度などとも言いませんが、せめて三ヶ月に一度位は自己反省の機会を持つことは大切なことと考えます。

次に大学院修士課程あるいは博士課程を修了し、めでたく学位を取得し、高度な専門職、あるいは研究者としての道を目指す皆さん、また学部卒業後、大学院に進学し、さらに高度な教育をうけようとしている皆さんにとっても今まで申し上げて来た事は重要な意味を持っております。皆さんにとって必要なことは**研究者マインド**の涵養ということであります。大学院を修了する人達は、すでに研究の厳しさや面白さ、またそれが独創的な発想によって導かれることも知っている筈です。研究者は、例えば実験や観察の結果などを正確に記録することがまず基本であり、そこから深い考察によって、新たな真理を導き出したり、大発見の糸口を掴むものです。その際失敗の記録や未解決な事柄についての克明な考察を残しておくことは、大変重要なことです。「アイデアが枯渇した時、研究に行き詰まった時などは、過去の実験ノートを見よ。そこには新しい発想のための宝の山がある・・・」ということをお願いしたいと思います。

また画期的な発想は、思わぬ閃きから生まれることが多いものですが、閃きは直ぐに失われて二度と思い出せないことがしばしばです。閃いた時は直ちに記録に留めておくことが必要です。私は寝るときも手帳を枕元におく習性がありますが、シークレットな内容も含め、様々な記録の詰まった我が日記形式の手帳は今や数十冊を数えるようになり、私自身の過去も、大学や関係した事柄の多くを検証できる手がかりを、いつでも与えてくれる、私にとって何にも代えがたい貴重な財産となっております。



最後に本学での勉学生活を終えて、めでたく卒業される学部9名、大学院10名の留学生の皆さんに対しまして、心からお祝いを申し上げます。帰国され、母国での活躍が期待されている人、またわが国で職を得て、引き続き日本に留まる人、様々ですが、言語も文化も習慣も異なる異国においての生活は、苦労も多かったことと思います。しかしそれが留学生生活というもので、その人の生涯を通じて最も心に残る時期の一つであろうと思いま



協力を頂いた諸団体や地域の方々に対しまして、大学として改めて深く感謝を申し上げる次第です。

す。私が米国に留学した30年以上昔は、故国の家族に電話一つかけることもままならぬ時代でしたが、一日も欠かさず記した日記は、当時の留学事情から生活のこと、大学での研究のこと、お世話になった人々のことなど、鮮明な記憶を今でも呼び起こしてくれます。留学生の皆さんも留學生活の中で記録した自らの歴史は大切に保存し、時々はそれらを読み返すことによって、将来のより良い人生設計の糧として欲しいと思います。なお留学生に対し、各種奨学金や生活支援の面で多大なご理解とご

「自分はひたすら前を向いて走り、決して後ろは振り向かない。過去にこだわることは退歩につながる」と豪語する人達がおります。確かにある局面では真理を含んだ言葉であり、私も若い頃は、そんな事を言った記憶もあります。しかし、ふと気がついて後ろを見たとき、踏み荒らされた茫漠たる荒野だけが空しく残っているということもあります。

ところで皆さんは、走る列車の前方展望車から見る景色と後部展望車から見る景色を比較したことがあるでしょうか。比喩的に申し上げれば、前方の景色は、刻々と大きく近づいて来る未来に対する、わくわくとする希望や期待を感じさせますが、一瞬にして過ぎ去った現在の過去の姿を見ることは出来ません。それに対し後方の景色は、過ぎ去った現在の過去の姿を比較的長く見届けることが出来る。むしろ遠い景色ほど、追いかけて近づいてくるような錯覚を感ずることがあります。是非一度試してみてくださいと思います。

かつてローマ法王が世界に向けて発したメッセージの中に「過去を振り返ることは、未来に責任を持つことである」というくだりがあります。言い換えれば「未来に責任を持つためには、過去を振り返る必要がある」ということとなります。私は「より豊かな人生を送るためにも、過去の検証・評価を踏まえ、未来を設計する必要がある。そのためには自らの歴史を正しく記録にとどめる習慣を是非身につけて頂きたい」ということを最後に申し上げたかったのであります。

皆さんが、これから体験する社会も、また大学そのものも、不透明で確たる展望が拓きにくい状況に現在はあると言えますが、そういう時こそ、現在そして過去の検証の上にとしっかりと軸足をおき、冷静な判断に基づいた将来のビジョンを自らの手で構築して行かねばなりません。皆さんの今後の健闘と、大きな転換点にある大学の正しい発展を心から祈念しつつ、学長としての最後のメッセージとさせていただきます。

平成17年3月22日

静岡県立大学学長
廣部雅昭

退官にあたり

静岡県立大学長
廣部 雅昭

平成11年4月本学の学長を拝命してから6年、無事任期を全うし退任出来ることの安堵感と、曲がりなりにも完投し得た後の心地よい疲労感に浸っている・・・というのが現在の偽らざる心境であります。

緊張の中で過ごした6年を振り返る時、今様々な感慨が胸中を去来いたしますが、退官にあたり、その幾ばくかを申し述べ、私を支え、かつ大学の発展のためにご尽力頂いた多くの方々への感謝の気持ちを表したいと存じます。



着任した当時、長引く経済不況や出口の見えない閉塞感もたらす“苛立ち”の中で、我が国の全ての大学は、その「あり方」を巡って、社会の厳しい批判に曝されておりました。大学審議会が打ち出した21世紀の新しい大学像：「競争的環境の中で個性の輝く大学」という新しい大学づくりの指針が示され、各大学は一斉に改革に走り出しておりました。創立12年を経過した本学に対する地域社会の目も、具体的成果を求めて、一段と厳しさを増して来ているように感じました。

学長就任に際し、「私は三代目学長、優れた文章の構成から言えば、起・承・転・結の「転」の役割であるが、大学にあっては「結」は不要。未来永劫続くであろう「転変」の歴史の最初を担うのが私の役目。「新幹線」が数十年を経ても「新幹線」といわれて違和感のないように、大学も常に「新大学」という意識をもって、創業の心意気を失わず、時代を先取りした改革を重ねて行くことが重要である・・・」ということを申しました（はばたき67号）。

「個性ある大学」を建学の精神に掲げてスタートした本学が、各部局それぞれの専門性の中で、固有の設置理念の明確な具現化と成果の創出を図るべく不断の努力を果たすことは当然とした上で、時代の趨勢を顧慮し「大学の自立的経営意識の醸成」「教育・研究の高度化と個性化」「開かれた大学としての社会貢献」「国際化の推進」を全学的な重要課題と位置付け、改革を含めたそれらの積極的な推進に取り組むことといたしました。当時大学の独立法人化という言葉が使われていたかどうか定かではありませんが、そういう方向性を察知して、まず「守りの大学運営」から「攻めの大学運営」への転換をはかるべく「大学経営会議」「学長企画室」などを中核とする運営・執行体制の刷新をはかりました。内部的にはかなりの違和感もあったようですが、事務局に新たに「経営課」を設置したり、学長裁量経費分の大幅増をはかって下さった設置者側の理解もあり、「評価に基づく資源の重点配分」や「競争的外部資金の積極的導入」など、大学の自立的経営意識が徐々に根付いて来たように感じています。このことは独立法人化など、より厳しい大学運営を迫られる時代の到来に向けてプラスになっていると考えています。

「教育・研究の高度化と個性化」は、いつの時代であれ、大学が常に心がけるべき重要な課題であります。特に独立法人化を視野に入れた場合、「個性化」は大学の存続を左右する大きな要素になります。本学は、伝統と実績を有する静岡薬科大学など3大学を統合すると共に、当時としては全国初といわれた食品栄養科学部、国際関係学部、経営情報学部などを新設し、「個性」をキャッチフレーズに静岡県唯一の公立大学としてスタートした筈であります。しかし“オンリーワン”というものは新規性を常に付与して行かない限り直ぐに色褪せる宿命をもっております。私は本学の有する研究・教育の特徴を、時代の要請にあわせ、さらに戦略的に融合し、社会から高く評価される新たな「個性」を生み出す必要性を感じておりました。そのために、まず各部局が他部局の教育、研究を相互に認識・理解する中から部局横断的な研究・教育の創出をはかる契機となればと学内外公開

の「静岡県立大学学術フォーラム（通称：USフォーラム）」の実施を提案いたしました。本年度で第5回目を迎え、一応定着した感がありますが、本学のアクティビティを社会に示す効果をも果たしていると考えています。その最大の成果として、大学院薬学研究科と生活健康科学研究科の研究を融合した「先導的健康長寿学術研究推進拠点」構想が、平成14年度文部科学省の21世紀COEプログラムに採択され、部局融合型新領域研究として社会から高く評価されましたが、その準備段階から実施過程にいたる両研究科の推進メンバーの溢れんばかりの熱気と一体感こそ、これからの大学の発展に必要なエネルギーであると強く感じました。その他にも各部局において新大学院、新専攻、連携大学院、新センターの設置等々、本学の教育・研究の個性化、高度化に資する様々な活動が展開されていることは周知の通りであります。

公立大学の「地域貢献」は、存立基盤そのものであり、大学の人的資源、知的資源の地域への還元を常に念頭においた様々な試みが実施されました。「産学官民連携」は専任コーディネータの配置など効果的な推進が図られつつあり、大学発ベンチャーの実現、知的財産権の確保など意識面での変革も急速に進んで来たと感じています。しかし地域社会とのコミュニケーションはなお不十分であるとの認識から、地域連携を所掌する大野副学長のもと、「地域連携連絡協議会」を設置し、大学と地域団体との双方向的な意見交換を通じて地域社会の大学に対するニーズの把握に努めております。

「国際化の推進」については、本学が創立当初より最も力を入れてきた事業であります。これまでの限られた学生、教員同士の親善的交流から、大学院連携をも含む研究者の積極的派遣へと軸足が移りつつあります。これも若手教員、院生の国際派遣等を奨励する21世紀COEプログラム事業の影響を強くうけていると考えております。

近未来に予測される大学を取り巻く諸状況の大きな変化に対応しうよう、その基盤づくりに教職員と共に努力して来た6年間でしたが、成果のすべては事に当たられた教職員各位の並々ならぬ努力と設置者の深いご理解あってのことで、ここに改めて感謝を申し上げる次第です。もとより全てが順調に推移した訳ではなく、手付かずで終わったもの、計画のみに終わったもの、仕組み作りはしたものの十分魂が込められていないもの、予定通り計画が進まなかったものも多々あります。次期執行部による、さらなる計画の充実・推進を心から期待する所です。

昨年4月より全ての国立大学は、一斉に独立法人化の道を歩むことになりました。戦後の学制改革以来の革命的な変化とも言えますが、かつての社会から隔絶された「象牙の塔」の中での唯我独尊的「大学の自治」「学問の自由」が崩壊したと言ってよいと思います。しかし現在、各国立大学は構想を逞しくし、むしろ生き生きとした活力を発揮しているように感じます。本学も独立法人化がスケジュールに上がってまいりましたが、何事も活性化には刺激が必要であります。「転変」の第二段は、法人化問題を中心とした大学の新たな改革ということになりましょう。次期学長の手腕と大学構成員各位の当事者意識の発揚によって、静岡県立大学が世界に輝く個性豊かな大学として格段に飛躍されんことを心から祈念し、退任の挨拶とさせていただきます。

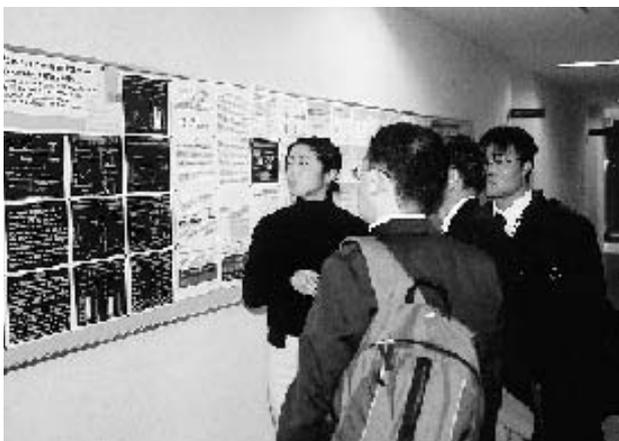
(平成17年3月31日)

第2回「産・学・民・官連携を考える集い」を開催

産学連携推進委員会委員長 木苗直秀

平成17年1月26日（水）に「産・学・民・官連携を考える集い」が開催された。

第1部では「午後1時から2時まで研究室公開」が行われた。薬学部棟、食品栄養科学部棟、環境科学研究所棟、国際関係学部棟の各研究室でポスターを展示して、教員が研究内容を説明した。本学を初めて訪れた企業の方もあり、熱心に意見交換する姿が見られた。



第2部は大講堂に場所を移して、午後2時10分より5時45分まで、363名が参加して講演が行われた。まず、廣部雅昭学長が「来学に対する御礼と産学連携について」のあいさつを行った。次いで、鈴木雅近副知事から「県民の静岡県立大学・産学民官連携への期待」と題してお言葉を頂いた。

木苗委員長が「本学の産学連携の取組みの現状」について報告したのち、合田敏尚助教授が「特定



保健用食品をめぐる現状と課題」と題して特別講義を行った。次いで、本学の技術移転成功事例として、木苗直秀食品栄養科学部教授の「田七茶の血圧上昇抑制作用に関する研究」、山口正義生活健康科学研究科教授の「骨の健康を増進する特定保健用食品の開発」、石田均司薬学部講師の「大豆イソフラボンの特定保健用食品への応用研究」と題してそれぞれ研究成果と産学連携の取組みを紹介した。さらに県立大学発のベンチャー企業を立ち上げた吉岡寿教授は「県立大学初のベンチャー企業の紹介—キトサン—の新しい利用方法—」について紹介した。基調講演は明治製菓株式会社常務取締役 小林敏之氏（静岡薬科大学8回生・昭和39年卒）が「明治製菓のヘルスケア事業展開—特定保健用食品開発における学との連携など—」と題して産学連携の重要性を、事例を示されながら紹介された。



午後6時より学生ホールにおいて、栗原 績県出納長のごあいさつ「県立大学の産学民官連携のさらなる推進を」との激励のお言葉のあと、梅田 正雄県商工労働部長の「県大と県民の産学連携に乾杯」との御発声により交流会が始まった。各企業、静岡県、市町村関係者、本学教員、学生などおよそ200名が参加し、アルコールや料理を口にしながら名刺交換を含め、積極的に情報交換する姿があちらこちらにみられた。本学マンドリン部の学生諸君に、美しい音色を奏でて頂いて大変感謝している。午後7時30分には全ての行事が終了した。

現在、本学では産学連携推進委員会や、21世紀COEプログラムおよび中部都市エリア事業（いずれも平成14年に文部科学省より採択）を通して、学のシーズを産のニーズに移行すべく、産学連携スタッフ制が整備されつつある。本学の産学民官連携をより一層推進させるため、静岡県、市町村、企業関係者、本学教員等のさらなる御理解と御協力をお願いしたい。



静岡県立大学の“産・学・民・官”連携を考える集い（開催概要）

開催日：平成17年1月26日（水）

- ①研究室の公開(各研究室 13:00~14:00)：参加者による研究室の自由見学
- ②特定保健用食品の現状と本学における技術移転成功事例等の紹介（大講堂 14:10~17:45）
 - ・県立大学の連携状況報告（産学連携推進委員長 木苗直秀教授）
 - ・特定保健用食品をめぐる現状と課題（食品栄養科学部 合田敏尚助教授）
 - ・技術移転成功事例紹介
 - 食品栄養科学部 木苗直秀教授
 - 大学院生活健康科学研究科 山口正義教授
 - 薬学部 石田均司講師
 - ・県立大学発ベンチャー企業の紹介（環境科学研究所 吉岡寿教授）
 - ・基調講演（講師：明治製菓株式会社 取締役（常務執行役員）小林敏之 氏）
- ③交流会（学生ホール 18:00~19:30）

2004USフォーラムを振り返って

USフォーラム実行委員長 野口 博司

2004US (University of Shizuoka) フォーラムが3月2～4日にかけて開催されました。本学創立15周年記念事業の一環として、学長特別研究費採択課題及び後藤研究費受領研究について、第1回学術フォーラム (I) の形で平成13年10月にその成果報告会が開催されて以来本年で第5回を数えます。

採択3年目の中間評価で最良の評価を戴き、代表的拠点として文科省のホームページにも掲載された、本学の平成14年度文部科学省21世紀COEプログラム採択「先導的健康長寿学術研究推進拠点」の研究討論会も合同開催されました。

演題数をみますと、学長特別研究—特別推進研究はポスターを含め34演題、うち部局融合型特別推進研究3演題、後藤研究費受領研究15演題、21世紀COEプログラム、研究推進者、研究協力者の発表が38演題でありました。また茶先端生命科学について伊勢村先生が総括講演をなさいました。

昔々大学紛争はなやかなりし頃、大学の教官も社会の問題に目を向けろと言う声に対して、「専門馬鹿でない学者なんか使い物にならない。」とおっしゃった著名な先生がいらっしゃいました。今は産学連携などが喧しく、むしろ象牙の塔の学者の方の希少価値が高くなりつつある社会情勢です。



とは申せ学間が実社会に本当の意味で役立つには複数の領域の研究者が協力しあえませんかといふことは今も昔も変わりません。このフォーラムは、隣人としての教員が互いにどんな研究を行っているか知りあう機会を提供するものでありますが、学外の方、いや多くの学生諸君も、このような機会が無ければ、教員同士、隣の研究室にいる教員のこと知りあう機会のほとんどないとは信じられないでしょう。それだけに教員は言うに及ばず、多忙を極めている事務方も含め多くの方々のご尽力に感謝しなくてはなりませんし、これを新しい県立大学の伝統としていかし続けなければならないと考えております。

大学全体としてみれば、最大の評価者は実はカスタマーである学生諸君でなくてはなりません。もし学生諸君でないとすれば学費を払っている父兄と納税者である県民でなくてはなりません。今後学部学生や大学院生諸君の参加にさらに努力しなくてはならないと考えます。

研究成果には、応用面の期待されるものが多々あります。毎回県試験研究機関の方々が数多く見えておりますが、地域産業への連携は公立大学最大の命題であります。本フォーラムは公開されており、このコミュニケーションの輪が学内研究者間のみならず地域産業界との輪になればと祈っております。

発表演題一覧（発表順）
3月2日（水）

<後藤研究（茶先端生命科学研究所）・講評>

発表No	発表者	所属・職名	発表演題
1	伊勢村 護	食品栄養科学部・教授(後藤研究費配分審査会)	平成16年度茶先端生命科学に関する講評

<21世紀COEプログラム>

発表No	発表者	所属・職名	発表演題
1	野口 博司	薬学研究科・教授	1.カルコン合成酵素 (CHS) ファミリー遺伝子情報を活用した新規植物ポリケチド類の創製
2	今井 康之	薬学研究科・教授	ペロ毒素に対するIgA型モノクローナル抗体の作製
3	大橋 典男	生活健康科学研究科・助教授	新興感染症の宿主応答解析と高血糖状態における白血球様細胞の機能解析
4	奥 直人	薬学研究科・教授	老化に伴うがん転移能の変化とがん予防防衛系の確立
5	太田 敏郎	生活健康科学研究科・助手	癌予防のための血管新生抑制食品の開発
6	熊谷 裕通	生活健康科学研究科・助教授	CoenzymeQ10投与による血液透析患者の酸化ストレス軽減効果の検討
7	合田 敏尚	生活健康科学研究科・助教授	核内受容体を介したシグナル伝達機構による機能性食品成分の利用効率の制御/臨床応用領域研究プロジェクト「生活習慣病発症予測因子としての酸化傷害指標と遺伝子に関する研究」の展開
8	小林 裕和	生活健康科学研究科・教授	植物細胞の葉食生産性を向上させるための葉緑体機能の強化
9	出川 雅邦	薬学研究科・教授	カルシウム拮抗薬による肝シトクロムP450の誘導:高血圧病態モデルラットを用いて
10	加藤 大	薬学研究科・講師	生体機能性分子の迅速な解析を指向した評価システムの構築
11	鈴木 康夫	薬学研究科・教授	糖鎖機能によるウイルス感染症の克服 ー食用素材分子の応用ー
12	山田 静雄	薬学研究科・教授	α 1遮断薬長期治療の前立腺肥大症患者における健康食品摂取状況の調査と葉食併用効果の解析
13	伊勢村 護	生活健康科学研究科・教授	DNAチップによる遺伝子発現解析のモデル系と茶成分の遺伝子発現への作用
14	寺尾 良保	生活健康科学研究科・教授	環境化学物質の動態とそれらの毒性評価
15	菅谷 純子	薬学研究科・助教授	食生活を基盤とした医薬品副作用の防止効果の評価技術の確立
16	中山 勉	生活健康科学研究科・教授	過酸化水素耐性繊維芽細胞株およびFe-NTA投与マウス腎臓のプロテオーム解析
17	鈴木 隆	薬学研究科・助教授	ヒトバラインフルエンザウイルス感染症に有効な選択的阻害剤の研究
18	増澤 俊幸	薬学研究科・助教授	新規ワクチン抗原の探索を目的としたライム病ボレリア発現プロテオーム解析とOms28発現に及ぼす温度の影響
19	横越 英彦	生活健康科学研究科・教授	ブナハリタケの脳内神経伝達物質及び脳機能に関する栄養神経化学的研究
20	木苗 直秀	生活健康科学研究科・教授	茶葉抽出物によるAGE生成阻害作用とAGEIによる好中球への影響に関する研究

<21世紀COEプログラム・・・ポスター発表>

発表No	発表者	所属・職名	発表演題
21	小林 公子	生活健康科学研究科・助教授	酸化ストレスに関わる遺伝子の個体差と生活習慣病
22	鈴木 裕一	生活健康科学研究科・教授	尿中カリウム排泄の日内変動
23	五島 廉輔	生活健康科学研究科・教授	ベンゼン誘導体が引き起こすアポトーシス抑制因子の探索
24	五十里 彰	薬学研究科・助手	マグネシウム輸送に対するパラセリン-1のリン酸化の影響
25	佐塚 泰之	薬学研究科・講師	Doxorubicinの抗腫瘍作用に対するAnserineの併用効果
26	唐木 晋一郎	生活健康科学研究科・助手	短鎖脂肪酸のラット遠位結腸運動に対する影響
27	阿部 郁朗	薬学研究科・講師	植物サボニンの基本骨格を構築するオキシドスクアレン環化酵素の機能解析と物質生産
28	武田 厚司	薬学研究科・助教授	シナプス可塑性と亜鉛:海馬苔状線維からのグルタミン酸放出に対する亜鉛の機能
29	古田 巧	薬学研究科・助手	カテキン類および関連誘導体の光アフィニティープローブの合成研究
30	小原 一男	薬学研究科・講師	脳血管のメカトランスダクションと脳血管攣縮に対する大豆由来チロシキナーゼ阻害物質ゲニステインの作用について
31	丹羽 康夫	生活健康科学研究科・助手	カテキン生産増強のための安全な選択マーカーを用いたチャ形質転換技術の開発と貯蔵形態の解析
32	渡辺 達夫	生活健康科学研究科・助教授	食品成分と辛味受容体 (VRI)との分子の相互作用
33	下位 香代子	生活健康科学研究科・助教授	エストロゲン代謝に影響をおよぼす乳癌抑制および促進因子に関する研究
34	清水 正則	生活健康科学研究科・COEポスドク	植物に遺伝子を導入するための安全な選択マーカー遺伝子の開発
35	寺島 健彦	生活健康科学研究科・COEポスドク	アストロサイト由来神経栄養因子、L-セリンの脳保護作用の解明
36	鈴木 綾子	生活健康科学研究科・COEポスドク	小腸吸収細胞モデルC2BB ϵ -1細胞における核内受容体 PPAR δ を介した遺伝子発現調節
37	アナン・オウナルン	薬学研究科・COEポスドク	Ⅲ型ポリケチド合成酵素遺伝子情報を利用した新規生理活性化合物の創製
38	伊藤 友子	生活健康科学研究科・COEポスドク	感染症を含む糖尿病合併症バイオマーカーの探索

3月3日（木）

<学長特別研究－特別推進研究>

発表No	発表者	所属・職名	発表演題
1	竹下 誠一郎	短期大学部・教授	川崎病におけるCD14のプロモーター領域の単一塩基多型 (C (-260) → T) 解析
2	中山 貢一(部局融合型)	薬学部・教授	遺伝子組換え動物作成や環境特定化学物質暴露実験の可能な動物実験施設の新設に向けて
3	阿部 郁朗(部局融合型)	薬学部・講師	非メバロン酸経路に関わる高等植物由来LytB酵素の構造機能解析
4	奥原 秀盛	看護学部・助教授	がん患者の退院後の生活支援に関する研究
5	東川 佐枝美	看護学部・講師	実習施設との連携への取り組み ー学内の授業・演習に医療施設側スタッフが参加することによる効果ー
6	藤矢 光昭(部局融合型)	経営情報学部・教授	カラマトリックスによる色覚特性評価システム
7	鈴木 直義	経営情報学部・教授	仮想空間のリアリティ (What makes virtual real?)
8	湯瀬 裕昭	経営情報学部・助教授	県立大学公開講座の蓄積公開に関する研究
9	吉村 紀子	国際関係学部・教授	コミュニケーション能力ーStaying on the Surface, or Going Deeper?
10	竹本 彩香	大学院国際関係学研究所・大学院生	欧州近隣諸国政策 (ENP)におけるEU-WNIS (西部新独立諸国)ーロシア関係
11	石川 准	国際関係学部・教授	GPSを用いた歩行者支援システムの研究

発表No.	発表者	所属・職名	発表演題
12	津富 宏	国際関係学部・助教授	静岡県立大学(特に、文系学部)におけるキャリア支援のあり方について
13	青山 知靖	国際関係学部・助手	ウェブ・コミュニケーションの失敗体験に視点を当てた教育の実践
14	嵯峨 隆	国際関係学部・教授	初期アジア主義の歴史的考察-日本と中国の間-
15	福永 有夏	国際関係学部・講師	DSB勧告実施確保メカニズム
16	今井 康之	薬学部・教授	FITCを抗原とした接触性皮膚炎の感作過程におけるフタル酸エステルの影響
17	三輪 匡男	薬学部・教授	抗炎症薬の開発を目指した食品成分、放線菌産生物中の血小板活性化因子(PAF)生合成阻害活性成分のスクリーニング
18	山田 静雄	薬学部・教授	排尿障害治療を指向した経皮吸収製剤の有用性の評価
19	鈴木 裕一	食品栄養科学部・教授	マウス盲腸におけるプロピオン酸吸収メカニズム
20	吹野 洋子	食品栄養科学部・助教授	境界型糖尿病・糖尿病患者における緑茶飲用と栄養摂取のインスリン抵抗性への影響
21	下位 香代子	環境科学研究所・助教授	多環芳香族炭化水素酸化体およびハロゲン置換体のバイオアッセイを用いた生体影響評価

<学長特別研究-特別推進研究・・・ポスター発表>

発表No.	発表者	所属・職名	発表演題
22	岩本 憲人	薬学部・講師	水道水中の変異原物質MXおよび類緑体のDNA修飾機構の解明
23	田辺 由幸	薬学部・助手	肺動脈の伸展誘発性応答の分子機構と肺高血圧病態血管の機能異常に対する薬物制御への応用
24	江木 正浩	薬学部・助手	遷移金属を用いるインドールアルカロイド類の全合成研究
25	五十里 彰	薬学部・助手	ナトリウム依存性糖輸送体の活性化によるシスプラチン細胞傷害の軽減とそのメカニズムの解明
26	植松 正吾	薬学部・助手	脂質膜の液晶化と酵素反応に関する界面化学的研究
27	北村 久代	薬学部・助手	ラット被囊性腹膜硬化症(EPS)モデルにおける凝固と基質沈着の解析
28	小野 孝彦	薬学部・教授	薬物治療の実地教育を目的とした「大学・病院・地域薬局連携の研修会」の試み
29	小田巻 眞理	食品栄養科学部・助手	24時間蓄尿によるたんぱく質摂取量と食塩摂取量評価の妥当性について
30	森安 裕二	食品栄養科学部・学内講師	植物の液胞形成
31	堀江 信之	食品栄養科学部・学内講師	生物種間における細胞増殖関連遺伝子プロモーターの多様性の解析
32	大橋 典男	環境科学研究所・助教授	我が国の野鼠が保有するBartonella属菌に関する分子遺伝学的研究
33	雨谷 敬史	環境科学研究所・助教授	車載型大型チャンバーを用いた建材からの有害化学物質発生量の測定手法の開発
34	小黑 大樹	生活健康科学研究科・大学院生	多環芳香族炭化水素分解菌におけるフェナントレン輸送系の解析

3月4日(金)

<後藤研究(一般研究)の部>

発表No.	発表者	所属・職名	発表演題
1	山田 静雄	薬学部・教授	抗酸化飲料クランベリージュースの循環器系薬理作用の検討
2	古田 巧	薬学部・助手	2,3-cis型カテキンの骨格構築法の開発研究
3	脇本 敏幸	薬学部・助手	烏龍茶に含まれる抗アレルギー物質OTACの供給法の確立
4	菅谷 純子	薬学部・助教授	食品中の凝集血小板解離作用成分の探索とグアニルシクラーゼが関わる新規な血小板情報伝達系の活性化機構の解明
5	武田 厚司	薬学部・助教授	亜鉛摂取不足によるグルタミン酸神経毒性の増大とその予防
6	石田 均司	薬学部・講師	Brevetoxin毒化マーカーについて
7	吉成 浩一	薬学部・講師	高脂肪食負荷肥満マウス肝におけるCYP3A発現低下機構に関する研究
8	鎌谷 東雄	薬学部・助教授	ビール中の消化管運動促進物質の分離と構造決定
9	田辺 由幸	薬学部・助手	バイオメカニカルストレスによる脂肪細胞の分化機能制御に関する研究
10	小林 公子	食品栄養科学部・助教授	高血圧に関与する遺伝子の個体差
11	熊澤 茂則	食品栄養科学部・助教授	プロポリスに含まれるポリフェノール成分の分析とガン血管新生阻害作用に関する研究
12	高野 佐智子	食品栄養科学部・4年生	野菜抽出液の炎症促進サブタンパク質S100A8/A9ダイマー形成に対する作用
13	古旗 賢二	食品栄養科学部・学内講師	食品・生薬由来の低辛味化合物の有効利用に関する研究
14	唐木 晋一郎	環境科学研究所・助手	ラット腸管粘膜における短鎖脂肪酸受容体GPR43の分布
15	木村 正人	看護学部・教授	ラット微小多発梗塞腎不全の進行における食塩制限と降圧薬の効果

21世紀COEプログラム成果発表会が開催される

2004 US (University of Shizuoka) フォーラムは、平成17年3月2日(水) - 4日(金)に開催された。初日には、文部科学省で採択されている21世紀COEプログラム「先導的健康長寿学術推進拠点」の本年度成果発表会が行われた。当日は、拠点アドバイザーの北川 勲先生(大阪大学名誉教授)、家森 幸男先生(WHO循環器疾患予防国際共同研究センター長)、長尾 拓先生(国立医薬品食品衛生研究所長)が御出席された。拠点リーダーの木苗教授が、同プログラムの進捗状況を報告したのち、事業推進担当者20名が10分ずつ、順次成果を発表し、質疑応答がなされた。また、同事業の協力者13名とポストドク5名は、1分間で概略を説明したのち、ポスター発表を行った。

その後、特別会議室で拠点アドバイザーより講評を頂いた。北川先生から「生活習慣病と薬食同源をキーワードとして研究体制をさらに充実させたい」、家森先生から「評価系の作出が重要であり、ヒト、地域を取り込んだ疫学試験を実施して欲しい」、長尾先生からは「食薬融合を前面に出し、焦点を絞った研究成果を期待したい」との御意見を頂いた。午後5時半から2時間余り、3人の先生方、発表者や大学院生が、アルコールや食事を口にしつつ、さらに意見交換を行った。科学者の卵である博士課程の学生にとっても実りあるひとときを過ごすことができたと思う。文部科学省より「良好である」との中間評価を頂いていることもあり、本拠点の研究がさらに加速されることを期待している。

21世紀COEプログラム拠点リーダー 木苗直秀



大学院薬学研究科に夕刻講義の治験・臨床開発特論開講

資源が乏しいわが国が生き残るためにも、新薬の開発は国家プロジェクトであり、治験が実施されやすい環境整備は、医療施設を管轄する厚生労働省の重点項目となり、静岡県においては、県民の健康長寿をめざす県健康福祉部の重要テーマともなっています。新薬の薬効評価の場である治験を推進するためには、医師の動機付けと、医師を支援する治験コーディネーターの養成が課題となっています。

治験コーディネーターに関する授業は、薬学研究科に医療薬学専攻が設置され、新に臨床薬剤学講座が開講された2002年春から同講座中野教授が大学院講義の一部として始めましたが、県内の医療機関から夕方に開講して欲しいという希望があり、県健康福祉部とファルマバレーセンターが医療機関の医療従事者が科目等履修生として申請しやすい環境を整えていただきましたので、薬学研究科と看護学研究科で協議し、夕方の講義として、社会人が出席しやすいJR静岡駅前、静鉄新静岡地区で授業場所を検討しましたが、学外での開講には文部科学省の講義場所設備基準があるため実現せず、結局は薬学部棟1階講義室に決まりました。

準備が遅れたために、2004年後期開講となり、10月6日に三輪薬学研究科長の挨拶による開講式を行い、土居静岡県理事の「ファルマバレー構想と静岡県治験ネットワーク」の講義からシリーズが始まりました。治験に関しては静岡県内人材の総応援を得て、前半では浜松医科大学の梅村教授、山田浩助教授、後半には聖隷浜松病院で実績を積まれた鈴木千恵子臨床研究管理センター課長など、学内からも小野教授など薬学研究科の4教授と佐藤看護学研究科長が講義をしました。県内の病院からは東部では沼津、西部では浜松から毎週水曜日、夕方7時からの講義に通いました。

2005年2月2日には14回目の講義を迎え、授業の後に修了式を行い、単位等履修生17名に学長名の単位認定証が三輪薬学研究科長から手渡されました。学内からは大学院生約50名、四年生約10名が受講しました。

大学における治験コーディネーター夕刻講義としては、国際医療福祉大学が2004年春に開講しましたが、国公立大学としては最初の開講ではとされます。ご多忙の中、夕刻授業を担当なさった9名の非常勤講師に感謝します。



第1回講義での土居静岡県理事による講義風景



終了式での三輪薬学研究科長による単位認定証授与

本学教員の著書紹介

『健康を考えた食品学実験』 食品栄養科学部 助教授 渡辺達夫

食品学の実験書は多数出版されているが、「食品成分表」のデータを出すのに用いられている分析方法が、わかりやすく解説されている本はない。そこで、本書は、食品成分表での分析方法の基礎が分かるように、図版を多く取り入れ、項目と内容に配慮して出版したものである。さらに、最近の食品中の機能性成分として、数種類の分析方法を加えてある。

編著者：渡辺達夫（食品栄養科学部助教授）ほか

著者：古旗賢二（食品栄養科学部学内講師）ほか

2004年10月30日 アイ・ケイコーポレーション発行（2600円）



『役立つ教育研究』 国際関係学部 助教授 澤田敬人

書名：『役立つ教育研究－イギリスとニュージーランドの教育研究開発システム（OECD教育レポートシリーズ）』

（原著：Knowledge Management-New Challenges for Educational Research）

著者：経済協力開発機構（OECD：本部パリ、フランス）

訳者：澤田敬人（単独）

出版元：オセアニア出版社およびOECD日本語出版補助プログラム

発行年月日：2004年12月15日



本学教員からの著書寄贈 附属図書館

先生方から著書を寄贈していただきました。（平成16年10月以降）

図書館2階自由閲覧室の教員著作コーナーに配架してあります。

◎山田 静雄 教授（薬学部）

「クスリのことわかる本：クスリを扱う人のための医薬品応用学」 地人書館 2004

「新薬剤学」 南江堂 2002

◎板井 隆彦 助教授（食品栄養科学部）

「農村自然環境の保全・復元」 朝倉書店 2004

◎国際関係学部国際行動学コース

「清水駅前銀座商店街 地域通貨EGG（平成13年度フィールドワーク実習報告書）」 国際関係学部 2004

◎渡辺 達夫 助教授（食品栄養科学部）

「健康を考えた食品学実験」 アイ・ケイコーポレーション 2004

◎辻村 明 元副学長

「日本と韓国の文化摩擦」 出光書店 1985

「戦後日本の大衆心理」 東京大学出版会 1988

「日米間のコミュニケーション・ギャップ」 慶応通信 1984

他 計106冊

◎稲垣 瑞穂 名誉教授

「夏目漱石ロンドン紀行」 清文堂出版 2004

受賞

財団法人商工総合研究所

平成16年度中小企業研究奨励賞準賞を受賞

(受賞者) 岩崎 邦彦 (経営情報学部助教授)

(受賞図書) 「スモールビジネス・マーケティング」(中央経済社)



第18回高柳賞 (高柳研究奨励賞) を受賞

(受賞者) 渡邊 貴之 (経営情報学部助手)

(経 緯) 受賞の対象となった研究は、「信号/電源インテグリティ検証用シミュレーション技術に関する研究」である。モバイル機器やデジタル家電などの設計を円滑に行うために、製品試作前に計算機シミュレーションによって性能や動作を検証することが重要となっている。渡邊助手は、従来は困難であった高密度実装基板(パソコンのマザーボードなど)全体の電子回路/電磁界シミュレーションを、並列計算機によって可能とするソフトウェアを大手家電メーカーと産学共同研究により開発し、その成果は本年1月31日付け日経エレクトロニクス誌にも掲載されている。

なお、高柳賞は、故高柳健次郎先生のテレビジョン研究の御功績を記念するため、(財)浜松電子工学奨励会が、電子科学の分野において顕著な業績を挙げた研究者を表彰し、その研究を奨励するために贈呈しているものである。



第8回日本糖質学会ポスター賞を受賞

平成16年11月17日~20日にハワイ・ホノルルで開催された「日米合同糖質科学会議 US/Japan Glyco 2004」(米国Glycobiology学会と日本糖質学会の共同開催)においてポスター発表された高橋忠伸君[本学薬学研究科博士課程を昨春卒業し、生化学教室(鈴木康夫教授)にて科学技術振興機構研究員(ポスドク)として研究に従事]の発表演題「Molecular mechanism and evolutionary analysis of human influenza A virus N2 neuraminidase genes based on the transition of the low-pH stability of sialidase activity」が第8回日本糖質学会ポスター賞を受賞しました。ポスター発表500演題の中で候補となった72題の中から発表要旨、ポスターの出来栄、発表内容、質疑応答などを踏まえて選考されました。インフルエンザウイルスがもつNA遺伝子の新たな進化系統解析と酸性条件下におけるシアリダーゼ活性の安定化機構を分子生物学的手法により解明したことが受賞理由です。



第3回 SOHOしずおかビジネスプランコンテスト 最優秀賞を受賞

経営情報学部、岩崎ゼミ4年生、伊藤さん、伊倉さん、豊辻さん、伴さんが、静岡県中部地区SOHO推進協議会(会長 小嶋善吉 静岡市長)が主催する第3回 SOHOしずおかビジネスプランコンテスト最終審査会(2005年2月15日)において、学生部門の最優秀賞を受賞した。

(受賞者) 伊藤岳春・伊倉千絵・豊辻絵美・伴幸伸(経営情報学部4年)

(SOHOしずおかビジネスプランコンテストの概要)

起業家精神の高揚と柔軟な発想力・独創性に富む人材を発掘するため、静岡県内で新規に事業展開を目指す学生・社会人・主婦等を対象としたビジネスコンテスト。プランの募集、書面審査、ヒアリング、ブラッシュアップを経て最終審査会が開かれる。



研究助成採択

平成16年度（第17回）財団法人 中富健康科学振興財団 研究助成金

研究課題：糖尿病時の肝薬物代謝酵素レベルの変動における核内受容体の役割

主任研究者：吉成浩一(薬学部臨床薬品学教室講師)

はばたき寄金からのお知らせ

平成16年度 はばたき寄金 成績優良卒業生表彰

去る3月7日に行われたはばたき寄金運営委員会において、はばたき賞（成績優良卒業生）8名の受賞者を決定し、3月22日の卒業式において表彰を行った。

〈受賞者一覧〉

学 部	学 科	氏 名
薬学部	薬学科	福留 大輔
	製薬学科	櫻田 直美
食品栄養科学部	食品学科	加藤 綾子
	栄養学科	齊能 千夏
国際関係学部	国際関係学科	菅生 さなえ
	国際言語文化学科	鈴木 つかさ
経営情報学部	経営情報学科	鈴木 恵美
看護学部	看護学科	白岩 真由美

おとり会賞受賞団体決定

クラブ・サークル団体等で年間を通じ、顕著な成績を収めた団体、あるいは顕著な活動を行った団体に贈られる「おとり会賞」について、去る3月7日に行われたはばたき寄金運営委員会において、選考が行われ、下記の受賞団体が決定された。

なお、表彰は、4月20日の開学記念行事の中で行われる予定である。

〈受賞団体名〉

準硬式野球部…平成16年度静岡県大学準硬式野球秋季リーグ・全勝優勝（本誌91号掲載）

ボランティアサークルこんぺいとう…平成16年度青少年健全育成強調月間静岡県大会・青少年団体の部表彰（本誌92号掲載）

国際交流協定大学から教員・学生が来学

県立大学と学術交流協定を結んでいるモスクワ国立国際関係大学（MGIMO）及び浙江大学から教員と学生が来学されました。

MGIMOからは、同大学国際関係学部日本語韓国語モンゴル語インドネシア語学科助教授ラズドルスカヤ・ナタリア先生が来学され、1月下旬から3月上旬まで滞在されました。同先生は、平成7年度以来2度目の来学となり、「日本語教育におけるインターネットとソフトウェア使用について」をテーマに本学教員と共同研究をされました。



同じくMGIMOからは交換留学生として、同大学大学院地域研究科2年のマースロヴァ・アナスタシアさんが来学され、2月上旬から3月下旬まで滞在されました。「日本外交の中東次元」をテーマに修士論文を執筆中とのことで、関係資料を収集するとともに、国際関係学部教員から指導を受けました。アジアの国を訪れるのは、日本が初めてとのことで、日本独特の生活習慣や地域の特性等をビデオに収めるなど熱心に日本社会の勉強をしていました。



浙江大学からは、人文学院教授の胡可先（Hu-Kexian）先生が来学され、2月中旬から3月下旬まで滞在されました。同先生は、「唐代における政治と文学の関係に関する日本の研究状況」をテーマに本学教員と共同研究をされました。また、同先生は、自著である「中唐政治与文学」、「政治興変与唐詩演化」及び「杜甫詩学引論」の3冊の文献を附属図書館に寄贈されました。



イギリスで出会った宝たち

国際関係学部国際言語文化学科 3年 松浦千草

2004年の幕開けと同時に私は日本を飛び立ちました。それは‘未知なる無形の宝’を見つけるための長い旅の始まりでした。ヒースロー空港に降り立った時は沸き起こる興奮をおさえる事ができませんでした。

イングランド南東部 worthingという小さな海辺の街で私の生活はスタートしました。右も左も分からず始まったこの街には、今まで想像することのできなかつたたくさんの出逢いのかたちがありました。そして、今それは私の心の中に消えることのない財産として輝き続けています。

— サイモン先生との出会い —

私の担任は「サイモン」先生という愉快的スコットランド出身の先生。彼のオリジナル授業は私たちを決して退屈させず、仲間との笑いも絶える事はありませんでした。英語のスピーキング上達法は口の筋肉を鍛えることから始まるというのがサイモン流。学校へ来る道中は、昨日あったことをひとり言のようにブツブツ言うだけでもその効果はあるという彼の力説は本当でした。「トイレの時間は大きな声で辞書を読む時間に。」「ベッドに入る5分前は快眠のためのラジオ集中時間。」「人と話すチャンスを増やすために夜はpubで交流しなさい。」・・・サイモン流英語上達法は「楽しみながら、短期で集中する」というのが鉄則でした。これを毎日続けると効果は抜群。サイモンクラスの仲間たちの英語力も彼の必勝法でみるみるうちにアップしていきました。

彼から学んだ一番大きな教訓は「郷に入っては郷に従え」を真の意味で実行する事でした。習慣やマナーの違いから起こるカルチャーショックを感じる事はあまりありませんでしたが、「国民性」という文化の違いにさまざまな場面で当惑することがありました。‘日本人’独特のシャイで謙遜する性格はここでの生活では裏目に出してしまうのです。「英語が上手になりたかったら自分はイギリスの女の子だと思って生活しなさい。ここはイングランドなんだ。」彼曰く、「なりきる」ことは言語上達に欠かせない事なのです。

— 日本語教師への道のり —

サイモンの意識改革によって、私も‘日本人’の誇りだけを残し、マイナスのレッテルは捨てて生活しようと思いました。

そして始まりから2ヶ月後、「日本語教師」として日本語を教える事を決めました。とは言っても、学校にも街のインフォメーションセンターにもそんな情報はありませんでした。まさにゼロからのスタートでした。まず、オリジナルのポスターを作り、近くの専門学校に通う友達に頼み、掲示してもらいました。学校近くのチャイニーズショップのオーナーも協力してくれました。



日本大好きなLucy（左）とHannah（右）



ひらがなを書くのも悪戦苦闘…！

幸運な事に、4人の生徒に出逢う事ができました。近代ビルの立ち並ぶ東京に憧れるバングラデシュの

少年、日本のファッション文化に興味のある二人のイギリスの女の子（最後には彼女たちと姉妹のように仲良くなりました。）、そしてゲーム制作会社に勤めるイギリスのおじさんは日本でビジネスを考えていました。目的によってレッスン内容も考えなければいけません。学習者を退屈させないように、工夫を凝らしたレッスンするヒントは担任のサイモンから学んだことを活用しました。

一回一回のレッスンで「日本語」という言語をひとつの外国語として客観的にみるチャンスを彼らは私に与えてくれました。彼らの学習意欲は私を感化させる源にもなり、お互いの良い刺激となっていたのです。

— 浸透する日本文化 —

前回イギリス留学した時よりも、「日本」という文化がイギリス社会のあちこちに散りばめられているのに気づきました。ロンドンを始め、大きな街には必ず日本食レストランがあり、「すしバー」の人気も上昇しています。ブライトンのおしゃれなお店では、着物がパーティ用ドレスとして売られ、日本語の書かれたTシャツを着ている人はもはや珍しくないファッションとして楽しまれていました。テレビで千利休や雪舟のドキュメンタリーをやっていると、イギリス人が興味深く私に質問してきたこともありました。私は、そういった日本ブームの中で日本語を教える事ができたのはとても幸せだったと思います。



インターナショナルなフードパーティで手巻き寿司をつくりました。
(手前左が私)

まだ「サムライ」や「ゲイシャ」のイメージが強い人も中にはいますが、「日本」は他の国から見ると、とても不思議な世界としてイメージ化されています。

風情ある寺院が立ち並ぶ古都の街があるかと思えば、想像できないようなクレイジーファッションで翻る渋谷の雑踏。ハイテクな電化製品と世界初の多くのエンターテイメント。和菓子×カフェ、振り袖×ブーツ・・・など成立しないような文化の方程式が存在してしまう国。他国の人々の目に映る日本は、自分の理解を超えていました。

イギリスで感じた一番のカルチャーショックは、この国に対してではなく、むしろ自分の国「日本」のさまざまな顔に対してではないかと思っています。

— 発見と再発見 —

海外に住んだら、その国のことを知る事ができるのは当然です。しかし、自分が当たり前のように暮らしてきた国の事を知るためには、一度離れて上から地図を見るような視点にならなくてははいけないと思います。

イングランドでの9ヶ月の生活が教えてくれた事、それは今まで知らなかったことを知る「発見」と今まで知っていたのに気づかなかった「再発見」でした。どちらも衝撃的で、それはまるで発掘できなかった宝を探し出せたような喜びに変わりました。



ロイヤルパビリオンーブライトン

これらの無形の宝たちはこれからも私の人生において、輝きを増していくでしょう。このイングランドで出逢ったかけがいのない仲間、そして日本で支えてくれた家族と友達、先生に感謝して・・・

心から「ありがとう」という気持ちを贈りたいです。

special thanks for everything made me happy.....

環境科学研究所・大学院環境物質科学専攻の動き

環境科学研究所長 寺尾良保
環境物質科学専攻長 横田 勇

静岡県立大学環境科学研究所は平成9年4月に創立し、平成17年4月には9年目をむかえることとなります。当研究所は大学院生活健康科学研究科環境物質科学専攻の土台として、「自然と人間との調和」を理念に、地域社会における環境問題の解明と健康で快適な生活環境の創造に寄与する研究、環境についての知識の普及と高度な技術者・研究者の育成、環境問題に関する国際協力・交流を行うべく創設されました。この目的に向かって研究所員一同、日夜、研究・教育に邁進しており、日々の研究・教育活動、研究所事業活動等は、毎年、年報として公表しております。

平成16年3月には、修士（環境科学）22名、博士（環境科学）2名を送り出し、4月からは、博士前期課程1年17名、同2年22名、博士後期課程1年5名、同2年3名、同3年6名と、教員26名及び客員共同研究員、研究生も加わり、総勢90名余でスタートしました。

平成16年7月には、当研究所が中心となり、第13回環境化学討論会が静岡市のグランシップにて開催されました。環境化学討論会は、800名余の研究者により3日間環境化学物質について幅広く討論される学会で、相馬光之大会委員長及び雨谷敬史実行委員長のもと所員一同が実行委員等で協力し、会期中、各会場とも滞りなく進行し参加者の好評を得ることができました。また、最終日の午後は、「環境研究交流しずおか集会（環境科学

研究所、静岡県環境衛生科学研究所、静岡県工業技術センター主催）」と合同で、一般県民を対象としてダイオキシンの現状をテーマとした講演会を開催し、200名余の参加者があり活発な討論が行われました。平成17年度には、岩堀恵祐教授を実行委員長とする水処理生物学会が開催される予定です。



環境化学討論会



環境研究交流しずおか集会

環境科学は、研究・教育活動をとおして快適で安全な生活環境の創造に寄与することが大きな使命であります。そのためには、研究成果を社会に還元するとともに、環境問題に関して市民の知識を深め、理解と協力を得ることが大切です。当研究所では、社会貢献事業の一環として、一般県民を対象に県民の日に因んだ研究所一般公開を開催し、親子環境教室、環境学習サポーター養成講座、環境科学講座、しずおか環境・森林フェアへの出展、折に触れての講演等々を実施してきました。さらに、環境教育、啓発活動を尚一層振興すべく、環境に係わる研究機関にも呼びかけ「地域環境啓発センター」設立に向け準備中です。一方で、当研究所の吉岡寿教授が天然新素材科学研究所（株）の役員に就任されたことは、県立大学発ベンチャー第1号として新聞紙上にも掲載され、本学における本格的な産学連携の礎となるべく今後の発展が期待されます。

当専攻の大学院生が修士課程2年及び博士課程2年生になると、専攻セミナー発表の試練がおとずれます。専攻セミナーは、修士及び博士論文研究の中間発表となりますが、院生も教員も比較的自由に討論できる雰囲気を作っておりますので、予想外の質問も飛び出して立ち往生する場面もあります。しかし、比較的少人数ですので研究所全体が一つの研究室のようなところもあり、研究室間の交流も盛んおこなわれ、それなりに楽しい学生生活を送っているようです。

地球温暖化が進行しつつあることを何となく実感し始めたように、環境問題は、長い年月を経て

目に見える現象となって現われるため、経済問題など他に差し迫った社会現象に追われると忘れがちになります。環境科学は比較的新しい学際的な学問分野ですが、環境があらゆる人間活動の場そのものであることに鑑みても、人類の将来にとって極めて重要な学問分野であることは間違いないと研究所スタッフ一同自負しております。

当研究所が芝生公園側の一角にあって比較的コンパクトなたたずまいのため、入り難いと感じる皆様には、5月末には研究室公開、8月末には研究所一般公開もありますので、是非一度お越し下さい。



研究所一般公開

附属図書館の動き

附属図書館長 伊勢村 護

近年においては、学術文献の電子化に伴い文献提供面で学術情報のデータベース化や電子ジャーナルの整備が進み、活用されています。本学でもその利用対応を必要としたところですが、21世紀COEプログラム、学部及び図書館等の予算により約6,000誌の電子ジャーナル、学術情報データベースや文献データベース等を年毎に充実させていきます。

4月からは雑誌論文データベース「MAGAZINEPLUS」及び創薬探索センター予算により化学文献情報データベース「SciFinder」及びのオンライン利用が可能になります。従来、冊子体で受入していた雑誌74誌が電子ジャーナルに切り替わります。

特に電子ジャーナルの活用は目覚しく、その利用状況を本紙91号でも報告したところですが、昨年度1年間に85,286タイトルのfull text、18,583タイトルのabstractsが閲覧されていますし、他大学への相互貸借による文献複写の依頼件数が減少していることからその成果がうかがわれます。

図書館では、この電子ジャーナルをより効率的に利用していただくために、発行所が不明でも必要とする雑誌にアクセスできるよう、誌名のABC順に配列したアクセスポイントを図書館のホームページに作成し、利用者の好評を得ているところです。



図書館システム面でも改善を図り、本学に所蔵していない文献を、他大学に依頼して取り寄せる相互貸借の申し込みをシステム化し、研究室等のオンライン端末から申し込むことが可能になり、従来のように申し込みのためだけに図書館へ赴く必要はなくなりました。

また、蔵書の目録データも図書館システムへの入力をほぼ完了し、目録カードを廃棄することができ、図書館1階ホールの大半を占めていたカードボックスを撤去しました。このスペースを活用して利用者用休憩室を設置したところです。



蔵書は、毎年約7,000冊（製本雑誌を含む）を受け入れ、現在32万冊余が書架に配架されています。本学図書館の特色のひとつとして、利用者がすべての書架に接して図書を選ぶことができますが、問題は配架スペースが窮屈になってきていることです。

自然科学系の内容的に古くなり、かつ、重複していた図書を廃棄（今年度約3,400冊）したり、電子ジャーナル利用等により減少した雑誌の書架を図書用書架に置き換える等の創意工夫をして、閲覧席を減少しないで書架スペースの拡張を図っていますが、抜本的な対応を必要とする時期にきています。



図書館の閲覧席は、1日平均570人の入館者により利用されています。その数は、システム改善や学術情報の電子化対応により、数年前に比べて多少減少していますが、開館時間を1時間延長して20時まで開館するようになってからは、延長時間帯の利用者数は従来に比較して約25%増加しており、利用者の利便向上が図られ、その成果を挙げているところです。



附属図書館は、大学の研究、教育、学習に対する学術情報、文献面における支援機能を運営理念とし、教職員及び学生等の利用者が効率よく利用できるように、文献の充実及びシステム等の改善を図り、サービスの向上に努めています。



静岡県立大学短期大学部の動き

短期大学部部长 田中丸 治宣

1. 第二看護学科の学生募集停止

短期大学部は現在、第一看護学科、第二看護学科、歯科衛生学科及び社会福祉学科（社会福祉専攻、介護福祉専攻）からなっている。このうち第二看護学科は、準看護師の資格を持つものが入学対象であるが、静岡県内の高等学校において準看護師養成が行われなくなるため、平成17年度から第二看護学科は学生募集停止となる。平成16年度入学生（入学定員40人）が第二看護学科の最終入学生となり、第二看護学科は平成17年度末をもって廃学科の予定である。これに伴い、平成17年度から第一看護学科（現在、入学定員60人）は20人の入学定員増を行い、入学定員80人の体制となる。



看護学科の学内実習



歯科衛生学科の学内実習

2. 学生の動向

短期大学部には平成17年2月16日現在、第一看護学科180人（1年生58人、2年生59人、3年生63人）、第二看護学科79人（1年生39人、2年生40人）、歯科衛生学科79人（1年生40人、2年生39人）、社会福祉学科社会福祉専攻102人（1年生50人、2年生52人）、介護福祉専攻102人（1年生49人、2年生53人）の学生が在籍している。平成16年4月以降、退学者は5人（第一看護学科3人、第二看護学科1人、社会福祉学科介護福祉専攻1人）、休学者は8人（第一看護学科3人、社会福祉学科社会福祉専攻4人、介護福祉専攻1人）である。休学、退学の理由は、心身の不調、志望変更等である。また、復学は、5人（第一看護学科1人、第二看護学科2人、社会福祉学科社会福祉専攻1人、介護福祉専攻1人）である。また、社会人特別選抜で入学した学生総数は23人であり、それぞれの学科の学生に刺激を与えている。



情報処理教室での授業

3. 本年度の新規企画事業

①看護学科学生に対する合同就職説明会

県下の病院では、一頃に比べ改善してきたとはいえ看護師の不足はまだ続いており、看護学生へ積極的に病院の情報を提供し採用に結びつけたいと考えている病院も多い。そこで、学生と採用希望病院とが直接対話できる場を設定することで、病院、学生双方の採用・就職活動が円滑に行えるよう合同就職説明会を開催した。対象は第一、第二看護学科の卒業年次生を中心とする希望者であり、約100人が参加した。参加病院は過去に学生が就職した実績のある県内の病院を中心に約40病院であった。病院ごとのブースに机椅子を用意し、学生は自由に各病院のブースを回って、病院の職員等から病院の概要や看護職員の募集案内等の説明を受ける形式で行った。なお、本年度は試行的開催であったが、本年度の結果を踏まえ、次年度以降も開催する予定である。

②社会福祉士国家試験受験対策講座

社会福祉学科社会福祉専攻の卒業生は、卒業後実務経験2年を経て社会福祉士国家試験受験資格が得られるが、これまで社会福祉士国家試験を受

験する卒業生に対しての支援がシステム化されていなかった。そこで社会福祉学科は、社会福祉士国家試験受験対策講座に取り組む企画を立て、卒業生に対するアンケートを行った。その結果、送付数178人、資格取得者10人、講座受講希望者21人（希望しない者23人）であった。10月、11月の6回の土曜日に午前及び午後各2時間の12講座を設定した。各々の講座は、本学の常勤の教員が担当したが、1人は過去に短期大学部に在籍していた教員に依頼した。実際の受講者は11人（平成10年度～14年度卒業生）であった。これらの講座は、受講者には大変好評であり、次年度以降も継続して実施していく予定である。



社会福祉学科 基礎技能（音楽）の授業



橘花祭（学園祭）での模擬店（平成16年11月）

本学地域連携連絡協議会の発足

県立大学地域連携連絡協議会

大学の機能として、従来、学生の教育と基礎研究に全精力がそそがれ、ともすると、大学は閉鎖的な象牙の塔といわれた時代がある。しかし、現在も教育と研究は大学の機能の2本柱であることに変わりはない。それに加えて最近では、多くの大学が開かれた大学を基本理念として、大学が持つ知的財産を社会に還元し、地域貢献、社会貢献を積極的に展開しようと活動しており、本学もその例外ではない。本学において、産学民官連携など、すでに積極的に行なっていることはご承知のとおりである。その他、現在、本学として実施しているものを列挙すると以下のとおりである。

- ① 公開講座（ビジネス講座、オープンレクチャー、オープンセミナー、ファーマカレッジなど）
- ② 小中高・大連携（小中高教員の研修、教員派遣による出張講義、講義への高校生受け入れなど）
- ③ 地域社会との交流・支援（災害時応急救護など）
- ④ 施設の地域開放（芝生広場、図書館、薬草園、キャンパスツアーなど）
- ⑤ ゼミ等による地域連携（障害者支援、街づくり助言、留学生との交流など）
- ⑥ NPO等との連携

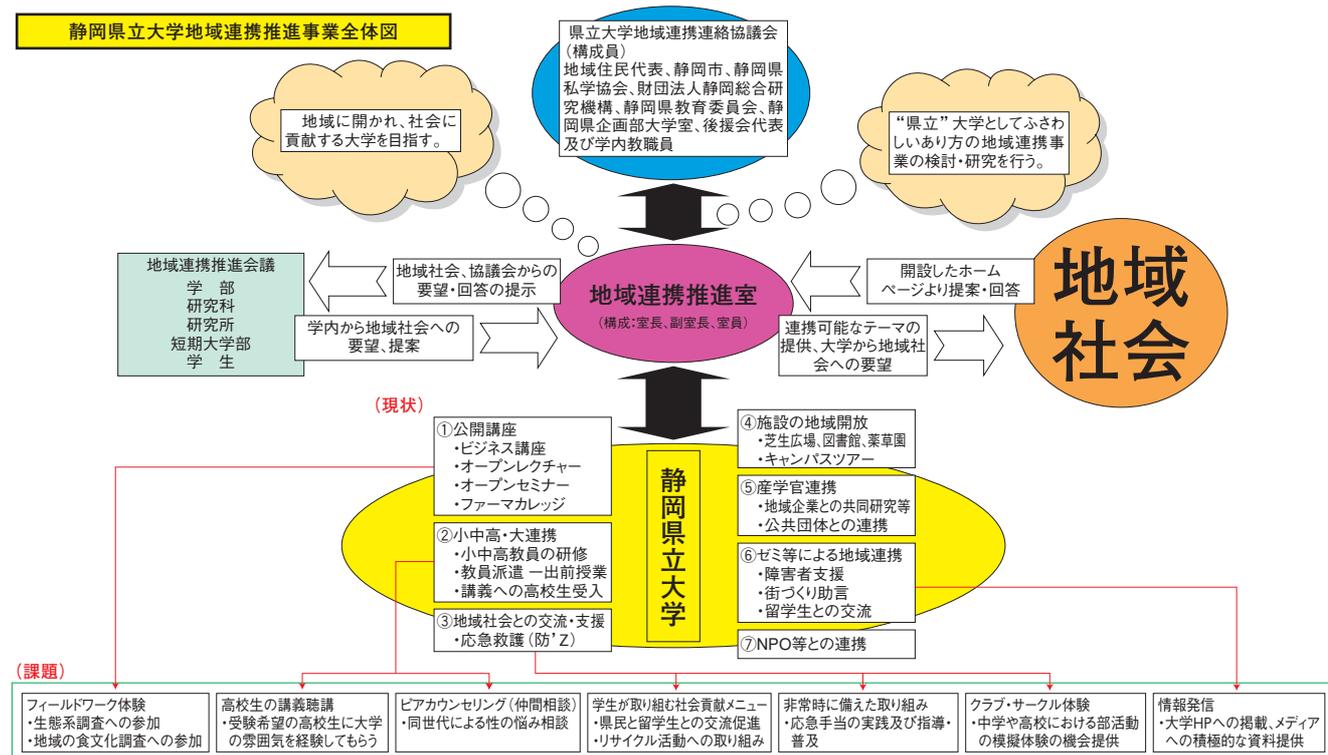
開かれた大学といっても、本学に地域社会が何を求めているのか、どうしてほしいのか、といった情報に疎いところがなきにしもあらずであった。また、本学がどのような知的財産を所有しているのか、何ができるのか、といった広報も意識していたとはいえ、充分ではない部分があるように思われる。

そこで、本学としては、できることから出発しようということで、静岡県立大学地域連携連絡協議会及び地域連携推進室の設置要綱を作り、その推進に当たることとした。

地域連絡協議会の構成員は、地域住民代表、静岡市、静岡県私学協会、財団法人静岡総合研究機構、静岡県教育委員会、静岡県企画部大学室、後援会代表及び学内教職員である。

また、地域連携推進室の職員は大学内教員の兼務で出発することとし、連絡協議会の初会合は平成16年12月17日（金）に実施した。協議のなかで、県大で地域貢献としてどういうことをやっているのか、みえない。広報がたりない。積極的に広報すべきだなどの課題が提示された。（第2回会合は平成17年3月7日（月）に開催した。）

なお、静岡県立大学地域連携推進事業全体図は以下のとおりである。



「静岡県立大学健康支援センター」の開設

保健衛生委員長 永井洋子（看護学部）

平成17年度から当大学内に、健康支援センターが設立されます。センター構想から3年半の月日がたっています。メンタルヘルスの重要性が叫ばれているにも拘らず、センターの開所までは遅々とした動きでした。しかし、今年度になって教員側、事務局、県庁大学室の呼吸が徐々に整い実現に漕ぎつけることができました。担当者としては皆様のご協力に心から感謝いたします。

センターは、図に示すように、5つの機能を持っています。第1は学生の心と身体の健康の保持・増進です。本学学生の健康状態をみると、不規則な食生活の者が多く、心理面では様々な悩みを抱えています。これに対応して、いつでも気軽に立ち寄れる心の相談室を開設します。また、積極的に自ら参加できる健康増進のための活動の場を提供します。第2に、職員に関する心身の健康の保持増進です。内容的には学生と同じ様に、心理的な悩みや家族関係の相談、さらに健康増進活動の機会を提供します。第3に地域住民（県民）の健康の保持増進、第4に健康科学関連の教育や研究です。本学は健康に関連する領域を研究する学部・研究科をもっており、地域住民に対して最新の知見を提供することができます。従って、地域住民の健康の保持・増進に対する実質的な貢献が可能です。学生を対象とした調査では、このセンターに対して、心の相談45%、健康度測定（体脂肪・骨密度等）56%などがニーズとして高い割合を占めていました。また、セクシャルハラスメント相談も1割近い要望があったことより専門家の配置を考えています。開所後はどうぞこのセンターを大いに活用し育ててください。

最後に、健康支援センターの設立は広い視野からみれば、健康に関わる総合的で専門的な組織としての拠点となり、本学が地域に開かれた大学という理念を推進し、ひいては日本一健康県を目指す静岡県の施策にも貢献できると考えています。

静岡県立大学健康支援センターの5つの機能

